



Tokyo Tech

# 人生を変えた 1 冊

～図書館サポーター活動報告～

---

2022年2月28日（月）

第15回学生応援フォーラム

発 表 : 黒丸 愛美  
資料作成 : JIN WEN

D1 環境・社会理工学院  
M1 環境・社会理工学院



- 動画制作等の広報活動、展示等の企画、資料の整備など  
図書館職員と協働して学びや研究をサポート

書架整理

返 本

図書装備

雑誌配架

企画展示

動画制作

人生を変えた1冊



# 「人生を変えた1冊」について



- 2018年度Start !

- ★ 図書館サポーターが研究室を訪問し、先生がたの「人生を変えた1冊」をインタビューして記事にまとめる。
- ★ 「本との出会い」に焦点をあて、志を継ぐ学生の視点で掘り起こす。

# これまでのインタビュー



安田幸一先生

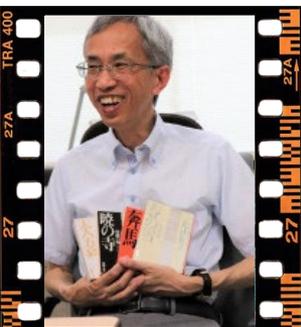
鞠谷雄士先生

山田功先生

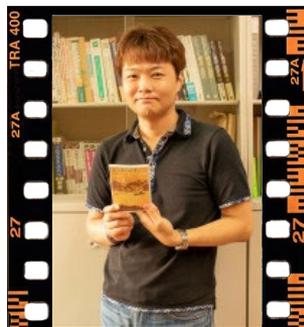
平原徹先生

斎藤礼子先生

伊藤亜紗先生



西森秀稔先生



首藤一幸先生



木山ロリダ先生



益一哉学長

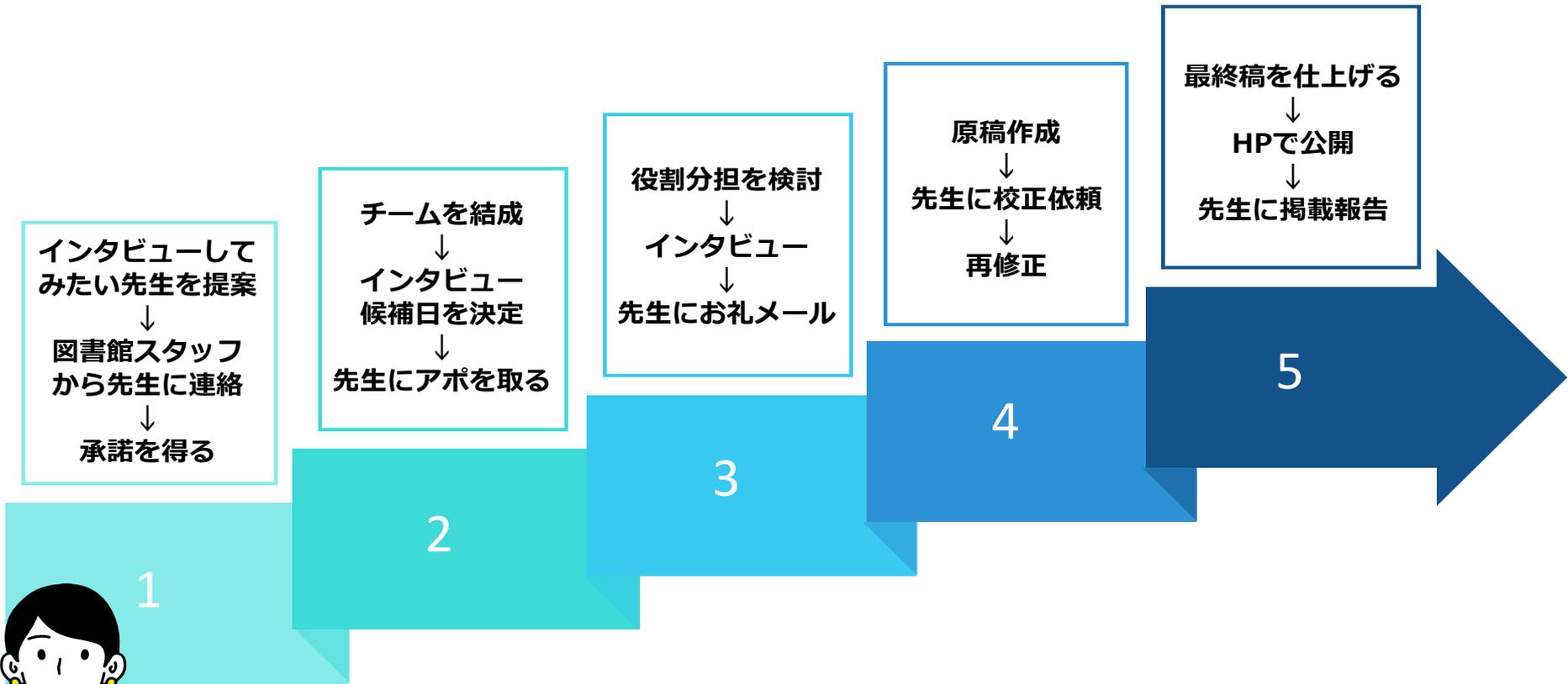


屋井鉄雄先生



一瀬宏先生

# 企画の進め方



講師：柳瀬 博一 教授 リベラルアーツ研究教育院

## 「インタビューとインタビュー記事をまとめる極意」

コツ

シナリオ通りに進めようとしない

本当に聞きたいことを3つ決めておく

相手の具体的な面白い話を引き出す



# 2021年度 企画成果



インタビュー	対象書籍	記事公開日
益一哉 学長	『人間失格』 太宰治著 『憲法講話』 宮沢俊義著	2021/12/9
山田功 教授 工学院	『数学入門』 遠山啓著 『数学・文化・人間』 遠山啓著 『驚くところ「ちくま哲学の森7」』 鶴見俊輔著 『悪人正機』 吉本隆明、糸井重里著	2021/10/21
屋井鉄雄 副学長/教授 環境・社会理工学院	『ファウスト』 ゲーテ著	2021/10/18
伊藤亜紗 教授 リベラルアーツ研究教育院	『リハビリの夜』 熊谷晋一郎著	2021/10/14

# 2021年度 掲載記事

## 益一哉 学長

### 東京工業大学 益一哉学長

人生を変えた一冊～好奇心を持ち続けて～



#### プロフィール

#### 学歴

- 1975年3月 神戸市立工業高等学校 電気工学科 卒業
- 1975年4月 東京工業大学 工学部 電子物理工学科 3年次編入
- 1977年3月 東京工業大学 工学部 電子物理工学科 卒業
- 1979年3月 東京工業大学 大学院理工学研究所 電子工学専攻 修士課程 修了
- 1982年3月 東京工業大学 大学院理工学研究所 電子工学専攻 博士後期課程 修了

#### 職歴

- 1982年4月 東北大学 電気通信研究所 助手
- 1993年4月 東北大学 電気通信研究所 助教授
- 2000年6月 東京工業大学 精密工学研究所 教授
- 2005年10月 東京工業大学 統合研究院 教授
- 2010年4月 東京工業大学 ソリューション研究機構 教授
- 2014年4月 東京工業大学 フロンティア研究機構 教授
- 2016年4月 東京工業大学 科学技術創成研究院 教授
- 2016年4月 東京工業大学 科学技術創成研究院 院長
- 2018年4月 東京工業大学 学長 (現職)

人生を変えた一冊として今回2冊挙げていただきましたが、まずは『人間失格』からお話を聞かせてください。

『人間失格』と出会ったのは20歳のときです。私は高専から東工大3年次に編入しました。右も左もわからない中、単位を取るために結構真面目に勉学に励んでいました。一方で、どこかぶらっと一人で出歩きのが好きで、一人で物思いにふけるとか、そのようなことに憧れを抱いていました。また、東工大に入って一人暮らしを始めて、大人びた気分になりました。太宰治の有名な『人間失格』を読みました。残念ながら、読もうと思った理由は覚えていません。主人公(大庭葉蔵)は漫画家ですが、『人間失格』は太宰治の自叙伝とも言われています。でも、わざわざ主人公を漫画家にして自分のことを茶化しているように思ったので、著者は恥ずかしがり屋なんだなと感じた記憶があります。

理工系学生は凝り性なので(笑)、その頃太宰治ばかり読みました。太宰治は『走れメロス』のような作品もあり、同じ著者なのに色々な小説を書くのだなとも思いました。太宰治全集を買おうと意気込んだのですが、残念ながら貧乏学生だったので手が出せなかったです。ただ、このインタビューの前に『人間失格』を読み直したのですが、すくく暗い話で、当時の自分はこの暗さによく耐えたなあと感じています。

この本を読んだことで、色々な考え方をする人がいるのだと感じる良いきっかけになりました。社会問題等も小説の中に多く含まれていたで、興味も広がりました。この後、島崎藤村をはじめ、遠藤周作などの純文学も読んだのですが、『人間失格』はいろいろな小説を読むきっかけになったので印象に残っています。小説を読むことで「気づき」などのような学びもできていたのかなと思います。

人生を変えた一冊に『憲法講話』も挙げていただきましたが、この本についても教えてください。

『憲法講話』を読んだのは中学3年生の時でした。中学生の頃、「社会」という科目の地理とか歴史は暗記科目と勘違いしてしまっていたので好きではありませんでした。ところが3年生の政治・経済では「考える」ということに繋がるかもしれないと思いました。偶然、夏休みの課題に出たのが『憲法講話』を読んでの感想文でした。結構、真面目に読みました(笑)。岩波新書の一冊で、新書を読みきっかけになったので、この本のことをずっと覚えていました。岩波新書を読んでいるって、何となく教養人っぽくて、憧れていたようにも思います。

最近読み返してみると、この本では、日本国憲法と明治憲法の違いも論ぜられていて、色々な角度からのもの見方があるということを感じました。

当時は赤線を引いて真面目に読んでいたのですが、その時どこに引いたのかももう一度見てみたいですね。変なところに引いたら笑っちゃいます。本の最後まで赤線を引きつつ読み切った、ということを感じているので、当時の自分にとってさっと面白かったと思ったのだらうと思います。たまたま宿題で出会った本だったけれど、多角的な見方を教えてくれた一冊です。



#### 学生当時は本をいっしょに読んでいましたか?

専攻に違いはあったが、あの頃はみんな1日1冊に読んでいたように思います。高専のころは1週間程度で6冊くらいまとめて読んでいたことが多くあり、「読書は毎日1冊で読め」ということを言われました。読書の楽しさや面白さを感じていたので、読むのが好きで、一人で物思いにふけるとか、そのようなことに憧れを抱いていました。また、東工大に入って一人暮らしを始めて、大人びた気分になりました。太宰治の有名な『人間失格』を読みました。残念ながら、読もうと思った理由は覚えていません。主人公(大庭葉蔵)は漫画家ですが、『人間失格』は太宰治の自叙伝とも言われています。でも、わざわざ主人公を漫画家にして自分のことを茶化しているように思ったので、著者は恥ずかしがり屋なんだなと感じた記憶があります。

#### 最近は何本を読んでいますか?

実は、あまり読んでいません。ただ『文藝春秋』だけは20日くらいから毎月読んでいます。高専から一緒に大学に進んだ友達も読んでいたことがきっかけです。今は記事全部を読めていないですが、昔読んだ本も読んでいました。

現役の教職の専門書も読んでいました。あるとき専門ではない『集積回路における電磁気学』という課題をもらったときは、ひとりで読んで勉強の古今東西の教科書や名作を60冊ほど読みました。とにかく引っ張らなくて、あの時々の課題を早くして終わらせたなと思います。それから最後まで読み切って、もう一度最初に関するこの重要事項を自分のためにも再確認することがあると感じました。読書はいいですが、映画も2〜3度見ることがあります。最近でいうと『ミッドウインター』や『ザ・グランド・バズ』や『ザ・グランド・バズ』などシリーズものを読んでいる人もいます。東北大にいた頃、遠藤周作に一人でドキュメンタリーをよく観てました。ビデオ版もある。1960年代の白黒映画なども見るようになってきました。名作は時を経て読むものです。

#### 学長のお仕事について教えてください。

学長になって研究の最前線からは離れています。東工大は研究大学ですので、学長として研究をする環境、機材、教員それぞれがどういう環境であれば研究ができるのか、学費をどう確保できるのかということも考えます。また、読書の楽しさや面白さを感じていたので、読むのが好きで、一人で物思いにふけるとか、そのようなことに憧れを抱いていました。また、東工大に入って一人暮らしを始めて、大人びた気分になりました。太宰治の有名な『人間失格』を読みました。残念ながら、読もうと思った理由は覚えていません。主人公(大庭葉蔵)は漫画家ですが、『人間失格』は太宰治の自叙伝とも言われています。でも、わざわざ主人公を漫画家にして自分のことを茶化しているように思ったので、著者は恥ずかしがり屋なんだなと感じた記憶があります。

それらから社会と多くの職種の長と短で、例えば学生が修業をしたなど、日々様々なアクシデントが起るのでもこれに似ています。研究であったときに何かを修得して研究のことを考えていたはずですが、学長になってからは前から進んで来たこと、教育や研究、学生、研究、事務、技術、文庫関係の働き方を考えることを考えています。私生活にも前から読まなくて来たこととあることを考えています。自分でも感じられている東工大のことを考えています(笑)。自分も頑張ります。

#### 学生に向けてメッセージをお願いします。

この話から始まったけど、結局は好奇心を持ち続けることが大切で、好奇心のつが読書に繋がるとは思っていないので、好奇心を持ち続けてください。そうじゃないと、私学がなくなった話の面白くないので、



#### 先生ご自身も本を書かれていますか?

『大学イノベーション創出』は大学の色々な方と議論したことが元となっていて、あとがきにも何故、私が学長になったかについて書いています。2018年に研究機構長を任せて、新しい体制を作りました。研究者が新しいことを発見したいと思うのと同時に、大学の経営やマネジメントも面白そうだと感じました。色々なことと好奇心を持ち続けることが大切とあらためて思いました。それから最近、『電子物理とデバイス』という教科書を出しました。この本の20年間の執筆を感謝され、読書を通して向後の天川修平先生(現・東工大)と議論を重ねてやっと思いを述べました。学生の時の恩師である藤田孝夫先生の『半導体の物理』はこの分野での名著として有名です。それらに負けたくないと思っています。学長としての好奇心、学長としての好奇心、それらの一冊を本と云うか表現できたかなと思っています。



好奇心を持ち続けることが大切とあらためて思いました。本日はお忙しい中ありがとうございました。

インタビュー(編集・社会理工学 社会・人間科学系 D1) 中島 亮平(環境・社会理工学 総合理工学系 M1) 島崎 宗輔(環境・社会理工学 土木・環境工学系 B4) 以上読書アドバイザー

# 2021年度 掲載記事

## 山田功 教授

### 人生を変えた一冊

—人生の伴侶となる本を探して—



山田功

Isao Yamada

東京工業大学 教授  
工学院 情報通信系

#### 経歴

1993年	東京工業大学	工学部 助手
1994年	東京工業大学	工学部 助教授
2000年	東京工業大学	大学院理工学研究科 助教授
2007年	東京工業大学	大学院理工学研究科 准教授
2009年	東京工業大学	大学院理工学研究科 教授
2012年	東京工業大学	理工学研究科 教授
2016年	東京工業大学	工学院 教授

#### ご紹介いただいた本

- (1) 遠山啓「数学入門(上・下)」
- (2) 遠山啓「エッセンス (7) 数学・文化・人間」
- (3) 「驚くところ」(ちくま哲学の森7)
- (4) 吉本隆明、糸井重里「悪人正機」

—まずは現在山田先生が行っていらっしゃる研究について、お聞かせ願います。

研究分野は情報通信分野で、その中でも信号処理やその基盤となる最適化の研究をしています。既存の数学的アイデアを借用するだけでなく、可能な限り独自の工夫を編み出すことによって、少しでも本質的な課題解決に迫ることを目標にしています。

信号処理というのは、受け取ったデータに適切な操作を少しずつ加え続けることによって、最終的に人間にとって価値のある情報を浮かび上がらせる計算技術を指します。画像の信号処理を例にとって説明すると、雑音によって埋れてしまった画像を受け取った時に、信号処理を施すことによって人間が被写体を判別できるレベルの画像を得ることが目標となります。グレースケールのデジタル画像は、 $256 \times 256$  の行列で示すことができます。行列はベクトルの形に並び替えられますので、画像の行列データは0を黒、255を白に割り当てたときの0から255までの数字を65536個並べたベクトルでもあります。このベクトルに少しずつ修復操作を加え続けてクリーンな画像に近づけたいのですが、効果的な修復操作を指揮できる高機能な漸化式\*1が必要です。「クリーンな画像ベクトルへの収束を達成する究極のアルゴリズムはどんな漸化式で実現できるのか」が僕の1つの研究テーマになっています。

凄く機能を備えたアルゴリズムを元となる漸化式から設計するわけですね。

—研究テーマとの出会いに至るまでが気になります。

話は高校生の頃に遡ります。当時の僕は数学が大好きで、大学進学では数学科に進むか工学部に進むかで悩んでいました。どうして工学部が気になったかという、工学部は必然的に人の役に立つものを生み出そうとする意識が強いので、自分の発見・発明した成果が世の中に受け入れてもらえるチャンスが少し高くなるんじゃないかと勝手に想像したせいだと思います。数理的な研究は、定理の正しさが証明できればその価値は未来永劫続き、発見者の死後も失われません。しかし、どんなに高尚な数学も私たちの生活や技術の中で何らかの効用が認められない限り、人の目に触れないまま忘れ去られてしまうのではないかと少し心配になったのです。また、今回紹介する数学に関する本の著者が「数学は『数学』の中に閉じてはいけないうので、新しいアイデアを開拓するために、数学者は純粋な数学に拘ってはいけない」と書いていることにも勇気付けられ、数学を活かした工学の研究に惹かれるようになりました。もしも工学の中で数学を活かせる分野を見つけることができれば、好きな数学を楽しみながら工学分野を開拓しているかもと、一石二鳥を狙って工学の道に進んだのでした。幸運にも、研究テーマを本気で考え始めた頃に20世紀以降の現代数学が信号処理分野に流れ込んできたこともあり、目論見通りに好きな研究を楽しむことができました。

\*1) 漸化式(ぜんかしき): 数列の各項がそれ以前の項の数値である等式



—最後に、読者や学生に向けてメッセージをお願いします。  
本との出会いは人との出会いと同じで、偶然の産物です。本を読むことに対して構えないでほしいです。僕も哲学は専門でなく興味本位で読んでいただけです。知識を積むやうな目的と云うより、人生の伴侶となるような本と出会うことが目的かもしれません。この出会いで幸せな人生を送ることができます。とにかく構えないことです。みなさんには、自分の相談相手となるような本に出会ってほしいと思っています。

インタビュー: 田島いづみ(工学部・社会理工学系 社会・人文科学系 M1)、中島景司(工学部・社会理工学系 総合理工学系 M1)、川橋直樹(情報理工学系 情報工学系 B2) 以上図解制作: ボーター

# 2021年度 掲載記事

## 「道」のプロフェッショナル



屋井 鉄雄  
Tetsuo Yai

東京工業大学 教授  
副学長 環境・社会理工学院

- 1957 生まれ、東京都練馬区出身
- 1980 東京工業大学工学部土木工学科卒業
- 1985 東京工業大学大学院土木工学専攻博士課程修了
- 1985 京都大学工学部土木工学科助手
- 1986 東京工業大学工学部土木工学科助手
- 1990 東京工業大学工学部土木工学科助教授
- 1994 マサチューセッツ工科大学客員准教授
- 1997 東京工業大学工学部土木工学科教授
- 2003 東京工業大学大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻教授
- 2016 東京工業大学総合理工学研究科長
- 2016 東京工業大学環境・社会理工学院教授土木・環境工学系都市・環境学コース
- 2017 東京工業大学副学長(産学官連携担当)

### ○先生の研究について教えてください。

僕の研究室では2種類の「道」の研究をしています。1つはフィジカルな「道」で、自転車から航空機までの交通における安全な空間を考える研究です。例えば、日本では自転車の数は多いですが、その安全な空間づくりは30年間行われていませんでした。自転車は歩行者の仲間に入れられていたからです。それが21世紀の高齢社会でルールが守られず、歩行者との事故も増えるなど問題が顕在化してきて、ようやく自転車だけの空間を作るようになりました。道路の他には、航空交通システム、鉄道システムについても研究しています。交通における安全な空間をつくる、そのために運用計画や空間をデザインするというのが1つ目のフィジカルな「道」の研究です。もう1つの「道」の研究は脳「道」、つまり計画実現までのプロセスの研究です。道路や鉄道などのインフラを作るときには便利になる人も一方で騒音など被害を受ける人も生まれます。自転車・鉄道などの乗り物は人や物を運ぶために必要でも、様々な人の協力・合意を

得られるような筋道を考えなければ実現できない計画もたくさんあります。そこで、僕の研究室では、インフラを造るのに直接必要な構造や材料の研究とは別の、インフラを社会に実現するためのプロセスの研究を行っています。

### ○ありがとうございます！先生の「人生を変えた1冊」について教えてください。

今回紹介する本として、学生時代に色々読んだ中から、ゲーテの『ファウスト』を選びました。学生の頃、社会工学科の渡邊貴介先生にこの本を勧められて読みました。渡邊先生は「土木ですごいんだぞ」とよくおっしゃっていたのが印象に残っています。最初に『ファウスト』を読んだ時には、第2部に土木のことが書いてあるということが分かりました。

### ○どのような内容なのでしょう。

話の内容は、ファウスト博士という学者が知識欲を満たせざっていたところに悪魔が来て、死後の魂の代わりに生きていく間は好きなことを叶えるという契約を結ぶということです。ファウストは生きること満足したら「時よどまれ、お前はいかにも美しい」と言って魂を悪

魔に渡すと契約をします。ファウストは、貧しい国に貨幣制度を導入して豊かにしたり、人造人間をつくりたりして、最後に民衆と共に新たな土地を開拓して都市をつくる福音を聞いて満足しました。ファウストはまず金銀工学、次にパイオ、そして最後に土木に関わりました。



先生が今年執筆された『土木と環境の計画理論 3つの並行プロセスによる計画づくり』

東工大の学生には理系と文系の2つのマインドを持ってほしいと思います。最近、文理融合という言葉をよく聞きますが、これは文系の人と理系の人両方がいて、役割が分かれた上で融合させています。しかし、東工大生に求めているのは1人の中に2つのマインドがある「文理両道」という事です。これが無いと、未来を考えたときに危ないと思っています。理系の理屈だけで考えてしまい、その他を文系の人に任せちゃうのではなく、社会に受け入れられる過程の人が考えるべきだと思います。アリストテレスの時代から、技術的に簡単に社会的に美しい事が良いとされ、知識だけでなくそれが社会にどう作用するかを知ることが大事である事が語られています。他の大学では、文系の学料があって、経済の専門や法律の専門の人に任せてしまおうという気持ちになるかもしれませんが、東工大は多くの学生が理工学系なので、自分で計画まで考えなくてはならないという意識がある程度あるのではないかと思います。そこをより深くして行ってほしいです。

東工大の学生へ

## 屋井鉄雄 副学長/教授

### ○先生はどのような事を経られたのでしょうか。

これは読んで、ファウストを満足させたのは読んだ土木で、ファウストが出た200年前から人間を究極で満足させるの土木なんだと思います。しかし、そのとばかり行っていて、読み飛ばしていたところがありました。僕の学生の頃は、講義を聞いても、馬の耳に念仏の如く通らない時期があったと思います。それあるときから研究の本が読めるようになってと勉強に入ってくるようになってきました。おそろしく聞く目を育てようとしてきたのだと思います。自分が人間として成長し始めたかなのでしょう。



緑タウ 自転車タクシー、アジア各産国で展開中。

最初読んだ際には土木はすごいなと思ったけど変わったのですが、後に知識を人に伝えるだけでなく、合意形成の大切さが記されていたことに気づいたのです。

### ○どのようにしてそこに気付いたのでしょうか。

90年代に、実際に合意形成の大切さを実感した事によって気が付きました。当時は社会に必要なインフラに対しては反対運動が行われても解決してはくたがなかった。社会全体で決められていくことがあったので、近視眼にとっては悪化していることがあったので、MIT 1にいた頃、アメリカでインフラの整備に関して合意形成が重要な役割を、市民参加の新たなルールづくりが導入されました。その当時の経験から、僕は以前に比べて合意形成の考え方を正しく日本に伝え、また新たに作る必要はなくなるんじゃないかと思いつきました。

### ○その経験から『ファウスト』の読み飛ばした部分を取り戻されたのですか。

はい、ちょうどその頃に『ファウスト』の第2部に出て読みました。読み飛ばしていた部分に自分の問題意識である合意形成の大切さが気づき返りました。それは、都市づくりの場中に、長く住んでいた老婦を強制に退去せよという形で、彼女を死なせようという場面で、どんな手筋をすれば合意形成できるのか、その

プロセスがなかったことが、200年前の『ファウスト』でも問題になっていたのです。学生の頃は、あまり気づけていなかった場面でしたが、次に読んだときは私自身が開通だしっから部議していたのでやっぱり理解できました。「ファウスト」は私の人生に深く影響を与えた本です。

### ○土木は素晴らしいという事が伝わってきます。先生が考える土木の良さはなんでしょうか。

みんなが未来を考える事だと思います。1・5・5ミルは、人間の潜在能力を最大限に発揮させるのが政府の役目であり、民主主義の根幹であると考えています。2は、物も、それはなかなかうまくいきません。また、現在は技術が進歩し、交通も物も便利になっています。人間が同質化、劣化していくことも懸念されている中で、潜在能力を高め、可能性を発揮できるように社会をどうやって決めていけるでしょうか。土木の世界では、『ファウスト』にあふように、他の立場の人を含めた話が満足するにどうしたら良いかという事を考えます。土木工学は住む都市自体に直接的にかかわるからです。その土地に住む人も関わりたいという事に繋がります。この、参加するにという事が大事で、誰かがどこかで決定したことに従うのでは考えない必要はたくさんあります。『ファウスト』にある



緑タウの模型と等身で映っているのは別にたくまの模型が壁に貼られている。興味を持って、先生が自ら持ってきてくださいました！

ように、みんなが目的の実現に向けて考えて高め協力し合う、これが土木であり、その問題の解決策です。そして、このことや21世紀の『ファウスト』で言われています。

### ○200年前の書籍が、今日同じ問題を置いているのは驚くべき事ですね。本日は、お忙しいところお時間をいただき、ありがとうございます！

脚注：  
1) MIT: 正式名でマサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology)  
2) J.S.ミル『政治経済論』(1861)

## 人生を変えた1冊

2021年7月27日  
ZOOMオンライン取材

人生を変えたネット記事というのはなかなかないです。  
人生を変えるのはやはり本です。



# 本と偶然性

伊藤亜紗先生

### プロフィール

東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長、リベラルアーツ研究教育院教授、MIT客員研究員(2019)。専門は美学、現代アート。もともと生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。2010年に東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学専門分野博士課程を単位取得のうえ退学。同年、博士号を取得(文学)。主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社)、『どもる体』(医学書院)、『記憶する体』(春秋社)、『手の倫理』(講談社)。WIRED Audi INNOVATION AWARD 2017、第13回(池田晶子記念)わたし、つまりNobody賞受賞。第42回サントリー芸賞受賞。



インタビュー：図書館サポーター 黒川 愛美 (環境・社会理工学院 社会・人間科学系 D1) (&記事作成) 図書館サポーター JIN WEN (環境・社会理工学院 社会・人間科学系 M1) 図書館サポーター 川橋 星奈 (情報理工学院 情報工学系 B2) 編集：図書館サポーター JIN WEN (環境・社会理工学院 社会・人間科学系 M1)

本は偶然性を開くことができます。

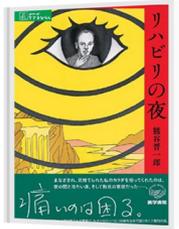
## 伊藤亜紗 教授

Q：先生が現在取り組んでいる研究をお聞かせください。

A：私の専門は「美学」という、哲学の兄弟のような学問です。哲学は「時間とは何か」「存在とは何か」のように言葉で言い表された概念を扱いますが、美学はむしろ言葉で言葉で言い表せないものを扱います。具体的には、人間の感情や感情、身体感覚、そして芸術作品などです。私は講義では芸術を教えますが、研究では「人間の体」をテーマにしています。美学という学問は西洋が発祥で、250年位の歴史を持っていますが、その創り手のほとんどが白人男性であったため、たとえば出産の問題が扱われていないなど、学問自体の視点が偏っています。彼らが感性、または身体について語っていることを東洋生まれの女性に当てはめてみると、リアリティがないことが多いのです。これまでの研究には、本物の身体が感じることをリアリティがない部分が多くあるのではないかと思っています。そこで、これまで研究対象にならなかった様々な人々の持つ感性について扱うことで、より現実味のある「美学」になるようにという考えから、障害を持っている人の感性などにフォーカスするに至りました。

Q：人生を変えた1冊である『リハビリの夜』について教えてくださいませんか。

A：著者は美術者—匿名という方です。現在は東大の先生で、医者であると同時に、脳性麻痺の当事者でもあります。この本は無言が自身の体について、リハビリ療法や人間関係なども踏まえながら赤裸々に語った本です。彼は、当時の西暦に似ているからリハビリを1日3時間ほど、18歳になるまで受けていました。麻痺であり伸びない手を無理やり引っ張られて痛かったと書かれています。しかし、最近の医学研究では、彼の脳性麻痺はリハビリの頻度が大きすぎたことが原因で明らかになっています。この本には、リハビリに対する考え方が全く違った時代に生きた筆者の経験から、効率的出ると信じずに無理に体を動かすリハビリや学校での同僚との交流など、多くの経験が語られてきています。私は、自分の体についてこんなに赤裸々に語って良いのだという衝撃を受けました。哲学や美学は「一般的」とされている身体について語りが乏しいです。私はその書の内容をよみました。この学問では、西洋の男性が本当はヨーロッパ人性のことしか表現に入っていないのに、しかもそれが普通の人間の体象性に当てはまることだ、人間とはこういうものだ、と一般化して語っていたことと対照的です。無言さんとはその常識を覆し、自分自身を例とした個別の体について圧倒的な表現力で語っています。当時の私は、個別のことを学問として取り上げて良いのだと驚愕を受けました。この本は私の実体験に基づいて自分自身をフォーカスしている中で読者のように読むことができます。自分の体と違う体の話ですが、自分自身にも重ね合わせたことが出来る部分、思い当たる節が多々あります。



Q：『リハビリの夜』との出会いはいったいどうでしたか。

A：東工大に着任したのが2013年なので、そのくらいの時期だったと思います。私は高校の頃まで多くを本を讀んでいたので、『人生を変えた1冊』に出会ったのは大人になってからでした。本を讀む代わりに夢中になっていたので、生動版で見た。特に足元が痛くなど、独自の世界を持っていく生物が好きでした。

Q：最初生物学を大学で勉強なさっていたとのことですが、どのようにして現在の研究分野に至ったのでしょうか。

A：大学に入った時は生物学を勉強しようと思いついていたのですが、しばらくして大学の扱う「生物学」と自分の学びたかったことに対して乖離を感じるようになりました。私が大学に入った頃には研究が情報化しており、DNAを読めば生命のすべてがわかるという考えが一般的でした。そこで、自分が考えた「生命とは何か」「昆虫とは何か」「自分が他の生物になった時に世界はどう見えているのか」のように生物について考えるには、文系分野にいたほうがいいのではないかと考えたのです。

大学二年生と三年生の間の休学期間に、専門を変えることを決めました。文系科目の勉強をしなればと思ったのですが、せっかくなら休学期間にやりたいことをしようと考えて、パリに職人修行に行きました。今のキャリアと関係があまりないのですが、仕事の合間に美術作品の鑑賞ができましたし、時間がたくさんあったので勉強もできました。実は、渋谷のBunkamuraで行われていたオートクチュールの展示会に感銘を受けて、オートクチュールの刺繍職人に対して興味が出て、勢いでパリに渡ったんです。

当時はインターネットこそ存在していたものの、わからないことがあったら検索するという習慣はない時代でした。だからこそ、現在ではネットで調べて「危ないかな」「将来につながらないかな」などとたくさん考えて行かないような場所にも、興味があるという理由だけで当時は飛び込んでいたのだと思います。突拍子もないチャレンジができたという意味では、若者にとっては当時のほうがめぐるれていたのかもかもしれません。

Q：伊藤先生が授業を行うにあたり心掛けていることは何ですか？

A：教育というものは「生もの」で、ライブの一つであると考えています。教員のちょっとした一言はクラスの雰囲気を変えますし、全く同じ授業をすることは二度とできないと思っています。気を付けていることは、学生を武装解除させることです。私は特に「感じる力」を育てる授業を行っています。芸術作品を鑑賞するとき、学生はどうしても正解を言わない教員に怒られてしまうのではと思って武装してしまいます。人は武装していると、緊張してしまっただけを感じることができません。武装を解除させて自分の意見を率直に述べてほしいです。間違ったことを言っても大丈夫という雰囲気を作って、そこから成長するプロセスをちゃんと踏めるように気をつけています。

### —記事を読んだ人へのメッセージをお願いします！

今はネットに沢山の情報が有り、本はオールドメディアになっていますが、私は本に可能性を見出しています。私自身、ネットの記事を書くよりも本を書く方が何百倍も楽しくて、書きがいがあります。

本は基本的に孤独に1人で読みますが、読み手の経験を照らし合わせて読みますね。読んだ人の数だけ解釈があって、自分も思いも経緯とミックスされた多様な感じのような身がいつか出ると、手と書き手の繋がりが出て、はないですが、本を通して解釈を通して、人間関係が繋がっていると思っています。



ネット記事は、すれ違いが起こると問題になるので、解釈の偶然性が起こらないように編集者が気を付けて書きます。内容も非常にコンサティブです。でも本はそれを通して偶然性を開くことができますし、本だから書けることを書いていると感じます。どんなに情報化が進んでも本を讀む意義があります。

人生を変えたネット記事というのはなかなかないですね。人生を変えるのはやはり本です。

# 図書館サポーターから



先生が仰った「人生を変えたネット記事というのはなかなかなくて、人生を変えるのはやはり本です。」という話は、とても心に響きました。



インタビューをまとめるという作業について、読者の人に何を伝えたいのかという点では論文を書くことと似ているのかなと感じました。



研究に追われる大学院生活ですが、専門に捉われすぎず面白いと思った情報に対しては興味の赴くままに調べたり考えたりすることを意識しようと思いました。



良い意味で、土木という分野に対する考え方が変わりました。